

リスク管理

年金保険料が職員によって横領されるリスク、警官の犯罪によって命を奪われるリスク。信じられない出来事からリスクの種類は広がる一方だ。

◇

世の中はリスクのオンパレードという観がある。ひとりの生活者のまわりを見ても、交通事故を引き起こすリスク、犯罪に巻き込まれるリスク、食品安全上のリスク、生活習慣病^{りかん}罹患^{りかん}のリスク、離婚のリスク、個人情報流出のリスク、熱中症で病院に担ぎ込まれるリスク、住んでいる自治体が破綻^{はたん}してしまうリスク…と限りがない。リスクは複雑化し数も数え切れなくなっている。

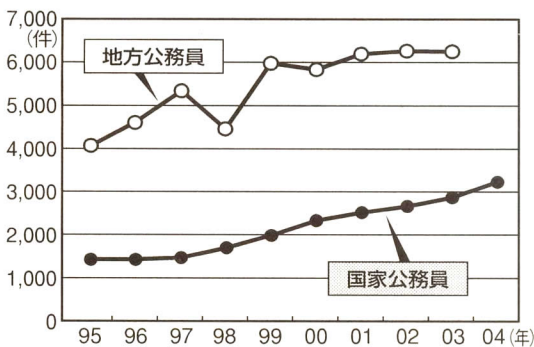
ところで、注意深く観察すると、公共システムの機能不全が、リスクの増大に拍車をかけている

リスクマネジメント

ABC

個人レベルの要諦

国および地方公務員の懲戒処分の推移



(資料) 04年度人事院年次報告書

(注) 地方公務員は各年度の処分数を示す。

(総務省自治行政局公務員部公務員課作成資料より)

相互扶助の仕組みづくりを

ことが分かる。将来、年金が受け取れないリスク、救急車で搬送されるものの病院から受け入れを断られるリスク、子供がいじめにあっても学校で取り合ってもらえないリスクは、これまであった制度の破綻から生まれ

は、「リスクを顕在化させない抑止力」の強化である。社会生活でも、経済活動でも、個人や企業の「個」と「自由」が過度に尊重された結果、私欲が暴走して、さまざまなリスクを産み落としていく。公共システムの担い手となる組織や職員であつても例外ではない。そこで、リスクの原因となる側に「こんな行動をとったら、とんでもない不利益を蒙る」という感覚を回復させるのがこの処方箋だ。例えば、法律の罰則強化という取り組みが当たる。

しかし、それでは息が詰まるというのも事実だろう。そこで「リスクを軽減するための免疫力」の強化という処方箋が望まれる。「近所の結束

力」のような草の根レベルの相互扶助の仕組みで影響は小さくできるということだ。例えば、激震災害において、救急隊到着までの近所の人々の初期動作の有無で、救命率には雲泥の差がつくのだそう。要は普段から、他人や社会に無関心にならずに、既存の権威とは別の小さな公共システムづくりに参画しておく、「個人」が「孤人」にならないようにしておく、これが現代社会における個人レベルのリスクマネジメントの要諦といえるだろう。

企業においても、ルールの明確化と社員が相互に助け合っているという感覚の醸成が不祥事を防止する鍵と言われる。リスクマネジメントの本質はまったく同じなのである。(日本総合研究所)